

## 育児書における「どもり」の記述について

坂本英樹（どもる子どもの親、教員、  
NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト）

子どものどもりに気づいたとき、親として最初に何らかの知識、情報を得るための手段として「育児書」の存在があげられる。育児書にはその社会で育まれてきた子育てに対する先人の知恵と最新の医学的知見が示されていると理解されているから、親に与える影響は大きいものがあるだろう。

この資料は育児書のなかの吃音に関する記述を紹介し、執筆者の吃音に対する考え方を考察することを目的としている。取り上げる育児書は2冊、いずれも定評のあるものである。

## ① 長らく読み継がれてきた育児書—松田道雄 1999 「[定本]育児の百科」岩波書店

1967年に出版され、その後1980年に新版、1987年に最新版、1999年に定本として3度の改訂を経た累計160万部に及ぶ育児書のベストセラーである。現在、定本版は品切れとなっているが、いまの時代にそぐわないとして「子どもの病気」の項目を省いたうえで、岩波文庫として2007年に(上)、2008年に(中)、2009年に(下)と3分冊の形で出版されている。

松田道雄(1908～1998)は小児科医、評論家、ベ平連への参加などの市民運動家等の多彩な側面をもつ戦後を代表する行動する知識人である。岩波文庫の〈日本思想〉に加わったことで、実用的な育児書という枠を超え、松田の育児哲学として研究され、後進に影響を与えていくものと考えられる。

どもりに関する記述は2箇所、ページ数は1999年の定本版による。

## 「2歳から3歳まで」(p549～p550)

## 『402 どもり』

「この年齢で、どもりがおこってくることがよくある。男の子におおい。最初は子どもはあまり気にしないが、母親のほうでおどろいてしまったり、いいなおしをさせたり、しかったりすると、子どものほうもこだわりはじめる。ことばをたくさん知っている子だと、たくみにいいにくい音をさけてほかのことばで表現する。

母親の矯正があまりきびしいと、全然口をきかなくなってしまう。また子どもは、いいたいことがいえないので、じれて、ものを投げたり、地団駄をふんだりする。

どもりの原因ははっきりわかっている場合もある。左ききの子を右ききになおそうと思って、スプーンをもちかえさせたり、左手でもったクレヨンを取りあげたりした場合。子どもがおねしょをしたのを、きびしくしかりつけた場合。仲のよかった両親が、急に不和になった場合。友だちや姉ちゃんに非常に雄弁な子がいて、本人が何かいいだそうとすると先まわりしていかれてしまう場合。下に赤ちゃんができた場合など。

けれども、いくらさがしても、子どもの「情緒障害」をおこすような原因のみつからない場合もおおい。

幼児のどもりは矯正しなければ、早いおそいはあっても、すっかりなおる。いちばん大事なことは、両親の楽観的態度である。子どもに、どもりになってしまったり、まずいことになったという気持ちを与えると、なおりにくい。それだから、親は子どもに、どもりが存在しないかのようにふるまわねばならない。子どもがものをいうとき、どもるだろうか、どもらないだろうか、はらはらしながら口もとをみつめるのが、いちばんいけない。子どもが、どもろうが、どもるまいが、子どものいったことに、どもりだす前とおなじ態度で対応する。

親子のコミュニケーションはたもたれていると感じさせ、子どもに安心させる。いいおしをさせることは、コミュニケーションがうまくいっていないと子どもに意識させる。子どもは、そこでためらいを感じてどもる。

医者や児童相談所につれていって、衆人環視のなかで、どもりの実演をやらされることは、子どもにとって大きな屈辱であり、それだけ、発音前にためらいをおこさせる。3ヵ月でなおるものが、半年かかる。

特別の薬はのまさない。「吃音矯正学校」に3歳の子をつれていくのは、どもりをつよく意識させる意味しかない。」

### 「3歳から4歳まで」(p599～p600)

『443 どもり』

「どもりについては、2～3歳でかいたこと (<402 どもり>) を、もういちどよんでほしい。

3歳から4歳は、子どもの会話の能力がいちじるしくすすむときである。この話をしたいという意欲を何かではばむと、子どもは、話すことにためらいを感じる。そのためらいが、どもりとなってあらわれる。ねむいとき、疲れたときは、とくによくどもる。

たとえば、小学校1年生の姉がいて、その子が人にすぐれた雄弁家であると、弟が何か話しはじめるのを先取りしてしゃべってしまう。これがたびかさなると、弟のほうは、また姉に先にしゃべられてしまいはせぬかと、話す前にいらだち、ためらう。それがどもりになる。また、いろんなことが知りたくて、「なぜ」をしつこくくりかえすのに、母親がうるさくなって、「もうおだまり」とか、「男の子はそんなにおしゃべりをしちゃいけません」というのは、子どもの話す気をなくする。子どものどもりに無関心をよそおうことが、祖父母と同居していると困難だ。

3歳をすぎた子は、かなり長い話ができる。どもりになると、途中で何度も話がエンコしてしまうので、終りまで話すのに相当の努力がいる。親がいらいらした顔でみつめると、最後まで話す自信がなくなって、途中で話すのをやめる。矯正などすると、なおさらいやがって、話そうとしない。

いちばん大事なのは、子どもがどもって難渋しているときの親の態度である。ゆうゆうせまらずで、子どもに緊張感を与えないことである。子どもの顔をみつめもしないが、といてうわのそらみたくでもいけない。子どもの話を寛大にきいて、それに応じて返事をする。子どもが、どうしてもゆきづまっていえないことばは、何気ない態度で応援してやる。それで子どもの話を先にすすめる。親が話をする番になったら、不自然にならぬ程度にゆっくりと話す。会話はいそがないでいいものだという気持ちにさせるのだ。

子どもがどもりを気にして、しばらく何も話をしないような事態になったら、親子で子どもの好きな歌をうたうのもいい。音楽の好きな子では、これが成功する。子どもは、また発語するようになる。

子どもが緊張するのは、ほとんど全部、親がいらいらして、子どもにたいして平常心をもてないためである。母親が医者とゆっくり話をして、いいただけのことをいったあと、医者の説得で安心すると、子どものどもりがなおる例はじつにおおい。

子どものどもりにたいして無関心をよそおうのが治療なのだから、大きい子やおとなのかよう「吃音矯正学校」などに小さい子をつれていくのには賛成でない。どもりを意識させるからだ。」

### ② 今後、読み継がれていくであろう育児書—毛利子来、山田真 2007「育育児典」岩波書店

松田のものが岩波文庫という「古典」になったとすれば、それに代わるものとして岩波書店が大々的に宣伝に力を入れ、新聞等の書評でも多く取り上げられた育児書である。内容は「暮らし編」と「病気編」の2分冊になっている。2009年には電子化、CD—ROM版としても出版されている。

松田同様、毛利も山田も町医者としての長い経験をもっている。親の声を直接聞く小児科医の執筆によるものを出版するという岩波書店の考え方であろう。毛利は予防接種に対して独自の考えをもち、

山田は福島での健康相談会に参加していることから、放射能被害の問題についても発言している。二人はジャパンマシニスト社から出ている雑誌「ちいさい・おおきい・よわい・つよい」の編集代表でもある。どもりに関する記述は以下の2箇所。因幡晃

「暮らし編」のなかの「舌足らず(幼稚語)、どもる(吃音)」という囲み記事のなかの記述(p297)。

### 『どもる(吃音)』

「「デ デ デンシャ」とか「アノネ アノネ アノネ」のように急にどもりだすことも、幼い子では珍しくありません。

言いたいことが、わっとこみ上げてきたときに、そうなるだけ。異常などと思わないでください。大人でも緊張したり一度に多くを話そうとすると、どもることがあるくらいですから。

ですから、まず、治そうとかからないにかぎります。そして、ごくふつうに冷静に受け答えしていればよいのです。そうしていれば、たいてい、いつの間にかどもらなくなるものです。

しったり、言いなおしをさせていると、緊張を増して、よけいにどもるようになりかねません。気にして、子どもの口もとを見つめるだけでも、どもりはひどくなりがちです(→病気356ページ)。

ただ、どもったあげく、ことばがつまっていたときには、さりげなく、言い添えてやるほうがよいかもしれません。

また、どもり始めた原因を考えてみて、思いあたるフシがあったら、それを取り除いてやることのほうが先決。たとえば、親のしつけが厳しすぎたようなら、ゆるめる、保育園や幼稚園が合わないみたいなら、先生と相談することです。」

「病気編」のなかの「ことばの遅れ以外の「言語障害」という項目(p357～p358)。

### 『吃音(どもり)』

「どもりは子どもによく見られる現象です。医学用語としては吃音と言い、「ことばのつまずき」と形容するのがよいと思います。

たとえば「ライオン」と言おうとすると、「ラ、ラ、ラ、ラ、ライオン」というふうになってしまうのがどもりですね。医学的に説明しますと「ことばに関係のある筋肉がけいれんするために、話すときに1つの音をくり返したり、ひきのばしたり、つまったりして、ことばが流ちょうに出てこない状態」ということになります。

子ども100人のうち4人は、幼児期のどこかでどもるようになると言われています。男女比は4対1と言われているから、圧倒的に男の子に多いということになりますね。どもる子どものうちの60%は、家族の誰かがやはりどもったという経験があり、遺伝的なものがあると考えられています。

どもりはほとんどが2歳から5歳のあいだに見られ、とりわけ2～3歳が多いようです。

どうしてどもるようになるのか、その原因ははっきりわかっていないのですが、ほかの子がどもるのをまねしていたらどもるようになった、ということもしばしば見られます。

左利きの子どもの無理に右利きに直すと、あとでどもるようになるとも言われますが、その因果関係については現在も研究中で、結論は出ていません。

どもりは心理的な原因があつて起こると考えられがちですが、本当にそうかどうかははっきりしていません。心理的な原因を探そうとしても、見つからないことが多いようです。

どもりはしばらく続いたあとに自然に治ってしまうことが多いのですが、進行していく場合も、ときおり見られます。進行する場合、どんなふうに進化するかということ、次のようになります。

第1段階—どもりのかたちは主に、短い音節または音のくり返しです。具体的に言うと「おは、おは、おは、おはよう」とか「ね、ね、ね、ねこ」とかいうかたちになります。子どもはどもっていることに自覚がなく、また気にもしません。

第2段階—音をくり返したあと、その音をひきのばしたりし、それがより早くなります。「ね、ね、ね、ね—こ」というふうにもどるのです。子どもは自分のどもりに驚いているように見えることがあります、親が気にするほどには気にしていないようです。

第3段階—どもる回数が増え、話そうとするとことばが出せず、もがきます。しゃべろうとするとき、不必要に力が入ってしまいます。

第4段階—特定のことばをしゃべるのをこわがって、そのことばを避けたり、特定の相手と話すのを避けたりするようになります。成人のどもりに、よく見られます。他人とのつきあいに支障をきたすようになり、本人の悩みも深くなります。

こんなふうにもどりは進行することもあるのですが、幼児の場合、本人は深刻に意識してはいません。第2段階ぐらいいまだしか進まないことが多く、まわりが知らん顔して見ていれば、そのうち自然にもどらなくなるのです。

まわりの大人が気にしてかかったり言い直しをさせたりすると、どもりはひどくなることが多く、逆効果と言うしかありません。「直すべきなのはどもっている子どもではなく、気にして手を出す大人のほう態度だ」と言われるくらいです。

心理的なことが原因になっている場合は少ないと先ほど言いましたが、ときには原因が推定できることもあります。

たとえば弟や妹が生まれてしばらくしたらどもり始めたという場合があります、これは「赤ちゃんのほうばかりかまわないで、ぼくのほうにも目をむけてよ」という気持ちのあらわれかもしれません。お兄ちゃん（あるいはお姉ちゃん）のほうもだっこしたりして、赤ちゃんに対するような手のかけかたをしてやるのがよいでしょう。

保育園や幼稚園へ行きたくないという気持ちがどもりとしてあらわれることもありますから、園でのようすなどにも気をつけてみてください。

小学生になっても、なおどもりが続き、第3段階以上の状態になった場合は、「ことばの相談室」のようところで相談してみましよう。」

### ③ 育児書にみられる吃音観

松田は吃音の原因は不明の場合もあるが「はっきりわかっている場合もある」として、子どもの「情緒障害」をあげている。親子関係の何らかの軋轢や心理的葛藤がどもりという不適応をおこしているという訳だから、親、特に子どもとより長く接する機会の多い母親は穏やかな心境ではいられない。どんな親でも、あの時きつくしかりすぎたとか、ゆっくりと話を聞いてやればよかったというような経験はあるものだが、そうした出来事が意識の前面に出てきて、自らを責めてしまうことになる。そして、こうした不安を抱えつつ、「親は子どもに、どもりが存在しないかのようにふるまわねばならない」とのアドバイスである。

しかし、これは相当に不自然なコミュニケーションだろう。子どもは自分の話し方についての疑問を当然親に投げかけてくるのだが、「子どものどもりに無関心をよそおうこと」が必要なことから、子どもの疑問自体には答えないで、対応することになる。こちらのコミュニケーションの方が心理的葛藤に満ちているのではないだろうか。

子どもがこうした親との関わりから受けとるメッセージは、どもりについては語ってはならないということ、隠すべきものであるということ、つまりどもりは悪くて、劣っていて、恥ずかしいものであるという吃音否定の考え方である。子どもは親に話すことを促されるが、内容自体には関心を示さず、話し方ばかりに注目されていることを感じるだろう。そして、本当に話したいことについては話してはならないというダブルバインドのメッセージを受け取るのである。これこそ、子どもの精神を混乱させるのではないだろうか。

こうしたあり方は親にとっても負担の大きいものだが、松田は「母親が医者としてゆっくり話をし、

いいただけのことをいったあと、医者の説得で安心すると、子どものどもりがなおる例はじつにおおい」と楽観的である。しかし、医者からこう言われてしまうともう何も相談することはできなくなってしまう、親は言葉を飲み込んでしまうしかないだろう。松田のこの磊落な姿勢のなかに専門化支配の臭いを感じるのは私だけではないはずだ。

毛利・山田の解説はどもりの進行していく過程の説明がある分より丁寧なものだが、松田の初版から40年も経っているのに、その域を一步も出ていない。「どもり始めた原因を考えてみて、思いあたるフシがあったら、それを取り除いてやることのほうが先決」と子育てのありかた、子どもとの関わりに問題があるのではないかとの指摘は松田と共通するものだ。

そして、「どもりは心理的な原因があって起こると考えられがちですが、本当にそうかどうかははっきりしていません」と言いながらも、「ときには原因が推定できることもあります」との記述になっている。情緒障害という言葉こそ使われてはいないものの、あげられるのは相変わらず、弟や妹が生まれて、親の愛情がそちらに傾いたからといったような例である。文面から伝わってくるのは、毛利も山田も吃音についてはよく知らないということである。知らないながらも、従来からこう言われてきたというような内容に終始している。

「育育児典」の特徴は「障害」をもつといわれる子どもたちの暮らしにも言及しているところである。そこに示されている考え方は「当の子どもにも、障害のことを包み隠さず話してしまうにかぎりません。あいまいにごまかしていると、子どもが障害を自覚できず、かえって世間でとやかく言われることに傷つきそう。それより、きちんと教えて、恥じることではないと自覚させておいたほうが強く生きられると思います」（「暮らし編」p329～p330）というものである。この考え方は吃音という言葉に課題のある子どもたちにもそのまま当てはめることができるだろう。

「どもり」という言葉があまり使用されない日本社会の現状のなかで、子どもたちには自分の言葉の特徴について正確に表現できる言葉と知識が必要だ。それが子どもの自己概念を形成する助けになる。自分の言葉の特徴について「語れる力」を身につけた子どもは、他者にもよく働きかけることができるだろう。それが子どものどもりをサバイバルする力となる。

私たちが吃音の早期自覚教育を提唱するのは、小学校低学年、早い子どもでは幼稚園の頃から自分の話し方について意識をしているからである。毛利・山田は最後に小学校に入ってもどもる場合は、「ことばの相談室」のようなところに行くことを勧めているが、親としてはその前に、子どもが自分の言葉の問題について聞いてきたときにどう対応するかが問われている。親自身の吃音観、子どもとの向き合い方が問われているのである。「親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」とした由縁である。

#### 〈引用文献〉

- 「[定本]育児の百科」 松田道雄 1999 岩波書店  
「育育児典」 毛利子来、山田真 2007 岩波書店